

# Joseph Conrad と *Blackwood's Magazine*

— J. Landers, “The Story of James Barker” と “Heart of Darkness” —

西 村 隆

## I

Joseph Conrad の作品は、むろん現在ではイギリス文学史の “canon” に入るものと見なされ、また例えば “Heart of Darkness” (1899; 1902) や *Lord Jim* (1900) において使用されている、Marlow という語り手が友人に思い出話をするという語りの「枠」(入れ子構造) についても、「客観的」に「事実」を語ることの不可能性というモダニズム的な認識を表す先駆的な技法という評価が定着しているかに見える。<sup>1)</sup> しかし一方において近年、“canon” という考え方自体が疑問に付され、“canon” という概念はそもそも特定のイデオロギーに支えられ、またそのイデオロギーを再生産し強化する働きをしているのではないかという問い掛けが提出される中で、Conrad の作品やその技法に対する見方も問い直しを受けつつある。<sup>2)</sup> 例えば上述した Marlow の語りの技法については、その作品が掲載された雑誌の読者に合わせようとする試みから生まれたのではないかという議論も行われている。Conrad が初めて Marlow という語り手を登場させた作品は *Blackwood's Magazine* の 1898 年 9 月号に掲載された “Youth: A Narrative” だが<sup>3)</sup>、この短編は Conrad がこの雑誌に載せることを意識して書いた最初の作品であり、Marlow が男性ばかりの友人たちに思い出話をするという語りの「枠」も、この雑誌の読者層を意識したものだというのである。<sup>4)</sup> この時期の *Blackwood's Magazine* は中流階級以上の保守的な男性が好んで読む雑誌であったことが知られているが<sup>5)</sup>、“Youth” における語りの「枠」も、こういった男性がしばしば出入りする(女性や労働者階級に対して)排他的な社交クラブにおける談笑と同じ雰囲気醸し出そうとする Conrad の工夫であり、また Marlow というイギリス人の語り手を設定することによって、元々ポーランド人であった自らの「異国性」を覆い隠し、イギリスの愛国主義的な読者に合わせようとしたのではないかというわけだ。

確かに “Youth” の冒頭部分を読むと、このような読み方を裏付ける箇所が多々見られる。例えば冒頭の一文は、Marlow と聞き手たちが海の話に興じたことに関して「このようなことは、人々と海とが密接な関係にあるイングランドでしか起きなかつただろう」(“This could have occurred nowhere but in England, where men and sea interpenetrate, so to speak”<sup>6)</sup>)

というものである。そして、Marlow の話を聞く男たちの職業は “a director of companies, an accountant, a lawyer” (93) といったところで、いずれも中流階級以上の男性であるらしいし、このうち弁護士については “a fine crusted Tory, a High-Churchman” (93) と紹介されていて、彼の「保守性」を浮かび上がらせている。このように Marlow と聞き手たちという語りの「枠」は、ともかくそれが最初に登場した作品においては愛国主義と保守性に満ちた雰囲気醸し出すための道具立てであったかも知れず、モダニズム的な認識を具現化したものという見方だけでは説明し尽くせないものをそこに孕んでいるのだ。

それでは、その *Blackwood's Magazine* と Conrad の関係はどのようなもので、彼の作品にどのような影響を与えたのか。例えば Anthony Easthope は *Literary into Cultural Studies* (1991) の中で “Heart of Darkness was commissioned originally for the thousandth issue of *Blackwood's Edinburgh Magazine* and so may represent Conrad's intention to move towards a more popular market.”<sup>7)</sup> と述べているが、いずれにせよ *Blackwood's Magazine* への寄稿が Conrad に及ぼした影響を具体的に検証するためには、実際に同誌に掲載された他の作家の作品と彼の作品とを比較するに如くはないだろう。本稿において私は、*Blackwood's Magazine* とその出版社 Blackwood & Sons のこの当時の論調と Conrad の作品の関係を把握するための材料の一つとして、1902年に同誌を基にして編まれたアンソロジー *Tales from “Blackwood”* の第11巻に収められている短編小説で、Conrad の “Heart of Darkness” と同様にコンゴを舞台にしている J. Landers の “The Story of James Barker: A Tale of the Congo Coast” を取り上げて分析し、この時代のイギリス文化のあり方の一端とその中で Conrad の位置を俯瞰してみたいと思う。だが、まずその前の足固めとして、Conrad と Blackwood & Sons の関係について必要最少限の伝記的事実を整理することから始めたい。

## II

Conrad が *Blackwood's Magazine* に掲載した作品とその発表年・月を、小説に限ってまとめると以下ようになる。

“Karain: A Memory” (1897年11月号)

“Youth: A Narrative” (1898年9月号)

“Heart of Darkness” (1899年2月号 - 4月号。なお、*Blackwood's Magazine* に掲載された時には “The Heart of Darkness” というタイトルであった)

*Lord Jim: A Tale* (1899年10月号 - 1900年11月号)

“The End of the Tether” (1902年7月号 - 12月号)

1902年以降も散発的に、後に *The Mirror of the Sea* に収録される軽い海洋エッセイを載せたりしているが、Blackwood & Sons の当時の経営者 William Blackwood (三代目の経営者) と Conrad の関係は、1902年に Blackwood の「あなた (Conrad) はわが社にとってむしろ損失となっている」という言葉をきっかけに疎遠なものになってしまっており<sup>8)</sup>、その意味で Jocelyn Baines が言う通り、Conrad と *Blackwood's Magazine* との間に緊密な結び付きがあった時期は実質的に1897年から1902年までの間と見ていいだろう。<sup>9)</sup>

では、1897年に Conrad が *Blackwood's Magazine* に寄稿するようになった経緯はどのようなものだったのか。Conrad の書簡を手繰っていくと、“Karain” が同誌に掲載されるまでのいきさつが窺える。まず Conrad はこの短編を書き上げた後、それを高く買い取ってくれる出版社を探し、それまで付き合いのあった出版者 Unwin を通じてそれをオープン・マーケットに出した (言わば編集者の間での競売に掛けた) らしいことが、1897年4月14日付けの Conrad の手紙 (彼の文学上の最大のアドバイザーであった編集者 Edward Garnett に宛てたもの) から分かる。“Karain gone to Unwin today. In the letter I ask U[nwin] to give the story to you before sending out amongst editors. ... If you can find out *where* they are going to send it[,] at first tell me.”<sup>10)</sup> 結局、“Karain” を読んだ Garnett の “*Karain* [will] surely suit *Blackwood's Magazine*.”<sup>11)</sup> という助言に従って原稿は Blackwood & Sons に送られ、最終的には経営者の William Blackwood 自身がこの作品を読んだ上で *Blackwood's Magazine* への掲載を決めた。こうして Conrad と Blackwood との付き合いが始まったが、Conrad はこのことを1897年8月28日付けの手紙の中で、喜びを抑えかねる調子で Garnett に報告している。

I have a bit of news which I am bursting with. The other day I wrote to Blackwood's asking them to send me proofs early and so on just to give them my address. Yesterday I had a charming, friendly letter from W[illia]m Blackwood saying he would have the story ["Karain"] set up on purpose and at once asking me whether I would mind the story coming out in November instead of October, but leaving it to me and so on[.] ... At the end he asks me whether I have a long story "on the stocks" and wishes to know whether there is enough of it for him to see with a view to running it as a serial in the magazine. Imagine my satisfaction! ... All the good moments the real good ones in my new life I owe to you[.] ... You...sent me to Blackwood[']s when are you going to send me to heaven? (102-103)

この高揚した調子からも窺える通り、当時まだ駆け出しの作家で名声もなく経済的にも困窮していた Conrad にとって、著名な雑誌である *Blackwood's Magazine* に寄稿できることは大

変な魅力であったようだ。<sup>12)</sup> この気持ちが、同誌に合う作品を書こうという Conrad の熱意を生み、初めから同誌に載せることを意図して書いた最初の作品 “Youth” における (冒頭で述べた) 様々な仕掛けが生み出されたわけだが、それでは *Blackwood's Magazine* に合う作品の条件とは何だったのか。少なくとも Conrad 自身は、その条件をどのようなものと考えていたのか。

そのことを考える手掛かりとなるのが、“Karain” とほぼ同時期に書き上げられた短編小説 “The Return” についての Conrad の書簡である。Conrad は 1897 年 9 月 27 日付けの Garnett 宛ての手紙の中で、“The Return” についてこう述べている。“The Return! ... Now, as to selling [this work]. ... Shall I give it to Unwin to place? What Mag[azine]: would you advise? *Yellow Book* or Chapman perhaps. Eh?” (106) 既に見た通り、1 ヶ月ほど前に *Blackwood* との付き合いが始まったことに狂喜していた Conrad であるが、ここには *Blackwood's Magazine* への言及は全く見られない。代わりに彼が候補としてここで例示している出版社や雑誌は Chapman & Hall と、Aubrey Beardsley の挿絵で知られる *Yellow Book* である。結局、彼は原稿を Chapman & Hall に送り、同社に不採用の通知を受けたことが 1897 年 10 月 26 日付けの Garnett 宛ての手紙から分かるが (“Chap[man] and Hall...rejected the Return which I fully expected[.]” (115)), Conrad が “The Return” 出版に当たって *Blackwood's Magazine* を全く候補に入れていなかったことは示唆的である。“Karain” はマレー諸島で武器の密輸を行なっている冒険好きな 3 人のイギリス人が、マレー人の酋長 Karain の激白 (自らの恋、裏切り、戦いについてのメロドラマティックな告白) を聞かされて動揺するという話であるが、“The Return” はイギリスのブルジョワ的な一市民 Alvan Harvey の夫婦生活の崩壊を描いた作品であり、Conrad が出版社探しに当たってこのような題材の違いを考慮したのは明白だ。イギリス人から見て異国情緒溢れる東南アジア、そこで武器の密輸を行なっている無法者と、勇猛なマレー人酋長の秘められた過去、恋と冒険 こういった要素が、“Karain” は *Blackwood's Magazine* に合っている」という Garnett と Conrad の判断の根拠になったのではないだろうか。そのことを例証するのが本稿の目的の一端であるが、それではいよいよ *Blackwood's Magazine* に掲載された作品の一つを取り上げての分析に取り掛かりたい。Conrad が *Blackwood's Magazine* に寄稿していた時期でもあり、同誌に連載された “Heart of Darkness” が単行本に収められて出版された年でもある 1902 年に、*Tales from “Blackwood”*: *Being the most Famous Series of Stories ever Published Especially Selected from that Celebrated English Publication* と題するシリーズが刊行された。タイトルが示す通り、このシリーズは *Blackwood's Magazine* に掲載された小説のアンソロジーであるが、これの第 11 巻には “Heart of Darkness” と同様にコンゴを舞台にした J. Landers の “The Story of James Barker: A Tale of the Congo Coast” という短編が収録されている。この小説を吟味してみる

ことでこの当時 *Blackwood's Magazine* が看板にしていた作品（アンソロジーに収められていることがその証左である）の傾向がある程度掴めるだろうし、またこの小説は“*Heart of Darkness*”と比較してみるには好個の材料と言えるだろう。

### III

“The Story of James Barker”の粗筋は以下のようなものである。アフリカ・コンゴ沿岸の Kabooka という町で、イギリス人の Monke と James Barker が組んで象牙の取引をしている（現地人から象牙を買っている）。James は若者、Monke は彼よりずっと年上で、彼の恩人であり父親のような存在である。ある日突然、若いイギリス人の娘が彼らの取引所に現れ、2人を驚かせる。娘の名は Margaret といい、イギリスで住み込み家庭教師をしていたが勤め先がなくなって困った挙句、唯一の親戚である兄（スコットランド出身の荒くれ者 Bill M'Gibbon）に会うためにアフリカに来たのだという。西洋人の女性など全くいないこの地いきなりイギリス人の娘が来たことに James も Monke も当惑するが、何とか M'Gibbon を探し出して会わせてやる。M'Gibbon と Margaret はポルトガル領の Donde という町に去ってしまう。その後、M'Gibbon から James に、彼を雇いたいという手紙が来る。Margaret に会いたいばかりに James はそのオファーを受けるが、Monke は「女にうつつを抜かすのは軽率だ」と彼をなじり、諭そうとする。しかし James はそれを振り切って M'Gibbon の許へ行き、彼の下で働きつつ Margaret との仲を次第に深めていくが、M'Gibbon の事業はうまくいかず、財政的に行き詰まる。そんな折、ポルトガル本国から罪人として追放されたものの、ここ Donde で幅を利かせている悪人の Chaves という男が Margaret に目を付け、M'Gibbon に卑劣な取引を持ち掛ける。Margaret を自分にくれれば商売がうまくいくように取り計らってやる、逆にそうしなければ商売ができないようにしてやる、と。M'Gibbon はこの要求を受け入れ、そのため Margaret は Chaves から不埒な行いを受けるが、その度に James が彼女を助ける。James は Margaret を救うため、彼女を連れて逃げることにし、2人で Kabooka へと苦難の旅をする。しかし Kabooka に着く直前に Chaves とその手下たちに追い付かれ、James は Margaret を逃がすために一人で彼らを食い止めようとし、殺されてしまう。それを知った Monke が Chaves に復讐するために Donde に行ってみると、Chaves の家は既に焔に包まれている。これまで Chaves に虐待されてきたアフリカ人たちが Chaves を殺し、家に火を付けたのである。Monke は Margaret と共にイギリスに戻り、彼女と父と娘のような関係を築いて共に暮らし、James のことを次第に忘れていく。

もちろん、若者の恋と冒険、善人と悪人の対決を描いた他愛のないメロドラマと言えばそれまでである。だが、Conrad の作品と全く共通点がないわけではない。例えば、若い娘を巡っ

でポルトガル人の悪人とイギリス人の若者が対立するというモチーフは、やはり *Blackwood's Magazine* に掲載された Conrad の *Lord Jim* における Cornelius と Jim (奇しくも Landers の小説と同じ James という名である) の確執にも見られる。また、ポルトガル領は腐敗していてイギリス人に対して不正を働いてくるというステレオタイプは、Conrad の小説 *Victory* (1914) においてイギリス人船長 Morrison がポルトガル人の役人の奸計によって危うく船を奪われかかるエピソードにも見られるものである。

そればかりではない。例えば、James が Chaves の悪巧みを阻止しようとして Chaves の会社に忍び込んだ際、そこで柱に縛り付けられて痛め付けられているアフリカ人を目撃する挿話は、ある意味で “Heart of Darkness” の中の一挿話と酷似している。

[James] saw...the punishment-post of [Chaves's] factory, and beside it lay the naked form of a negro[...] ... The man was chained to the post[...] ... His ribs showed through his skin[...] ... The only sign of life about him was his eyes, which glittered with a piteous stare as James knelt down beside him. ... There was a tiny cup with a little water in it, which James put to the lips of the man, who made one effort to swallow, but could not. He was evidently dying. ... This was a piece of the cruelty of Chaves[.]<sup>13)</sup>

鎖に繋がれて苦しめられているアフリカ人の肋骨は痩せた皮膚の下で突き出し、生命を感じさせるものと言えば目に微かに宿る光だけ、そして水を与えてもはや飲むこともできず、死にかけている 西洋人に痛め付けられているアフリカ人の描写としては、“Heart of Darkness” の中のあの有名な描写と酷似していると言えるだろう。鎖に繋がれて強制労働をさせられ、肋骨が突き出すほど痩せこけたアフリカ人たちを Marlow が目撃し、さらに森に入ってみると目の奥の光だけが生命の証であるような弱り切ったアフリカ人たちを見て、ビスケットを渡すが相手は食べることもできないという、あの場面である。

Six black men advanced in a file[...] ... I could see every rib, the joints of their limbs were like knots in a rope; each had an iron collar on his neck, and all were connected together with a chain[.]<sup>14)</sup>

They [the Africans lying in the woods] were dying slowly it was very clear. ... Then, glancing down, I saw a face near my hand. The black bones reclined at full length with one shoulder against the tree, and slowly the eyelids rose and the sunken eyes looked up at me, enormous and vacant, a kind of blind, white flicker in the depths of

the orbs, which died out slowly. ... I found nothing else but to offer him one of my... ship's biscuits I had in my pocket. The fingers closed slowly on it and held there was no other movement[.] (156)

このように、西洋人（ポルトガル人とベルギー人）に痛め付けられているアフリカ人の悲惨な姿をイギリス人が目撃するというモチーフ、そしてその描写の仕方は、この2つの小説に共通した要素と言える。異なる点と言えば、Landersの小説においては（先程の引用の最後の文に表れているように）この暴虐な行いがChavesという個人によるものであり、彼の非道ぶりを表すメロドラマティックな指標にとどまっているのに対して、Conradの小説においてはこれが植民地事業の組織的な行為として提示されている点だろう。

違いはそれだけではない。“Heart of Darkness”においてはアフリカ人が概ね「物言わぬ犠牲者」として描かれているのに対し、“The Story of James Barker”においてはアフリカ人は復讐のためにChavesを殺し、彼の会社から金品を略奪するといったしたたかさを見せる存在として描かれている。上記の引用ではJamesは虐待されているアフリカ人に同情心を見せる存在として描写されているが、普段は彼自身もアフリカ人をやり込める、やり手の商売人である。例えばJamesがたった一人で大勢のアフリカ人たちとの商談をまとめ、象牙を買い上げていく場面では、アフリカ人たちは象牙に泥を詰めて重量を増やすなどの詐欺を働こうとし、それが露見してもまだ厚かましく値段を釣り上げようとしてJamesの付けた値段に不満の声を挙げる強欲な人々として描かれている。

James signed to a native to put [the ivory] in the balance, and it turned the scale at fifty pounds. Then he thrust a stout stick into the hollow root of it, and brought out the end of the stick covered with wet mud. A downcast look came over the faces of the owners as he smiled grimly and bade them clear the tusk. ... [H]e passed over the attempt to cheat, and after the mud had been scraped out of the tusk, ...considered his offer [and said it]. ...[I]mmediately his voice was heard, it was answered by a derisive chorus of a refusal from all parts of the room. (148-49)

この後、アフリカ人たちはJamesが提示した値段に対して“pretended frantic indignation” (149) を見せ、象牙の値段を釣り上げようと大騒ぎをするが、Jamesの毅然とした対応 (“he answered firmly, ‘What I have said I have said,’ and sat back in his chair with folded arms” (149)) によってその目論見を崩され、さらには西洋の工業製品が持つ堪まらない魅力も手伝って、Jamesの提示した条件を受け入れる。その光景を、三人称の語り手は「壮观だった」と述

べて racist な言語で描写する。

It was a sufficiently striking picture, the...cargo-room, with the many groups of stalwart black figures squatted before the solitary white man seated at his desk, and keeping the whole company in check, as it were; while behind him...were piled huge opened bales of gaudy-coloured cloths[...] ... Stands of old flint muskets with shining barrels...were ranged along the walls[...] ... Bundles of glittering swords...were placed beside hundredweights of heavy brass rings[...] ... The sight of all these riches was perhaps too tempting to the crowd of savages, for at last, though with a tremendous show of reluctance, James's...offer was accepted by them.[.] (149-50)

西洋から送られてきた品々の魅力に堪え切れず、しかしあくまで狡猾に “a tremendous show of reluctance” を見せながらイギリス人の提示した条件を受け入れる “savages” この描写の中に、アフリカ人に対する共感を見出すことは困難である。この交易の場面を “Heart of Darkness” と比較した場合、すぐに思い浮かぶのは Marlow がアフリカに来て最初の出張所でアフリカ人と西洋人の交易を目撃する、いや正確に言えばその際の大騒ぎを聞く場面だろう。それはこのように描かれている。

Suddenly there was a growing murmur of voices and a great tramping of feet. A caravan had come in. A violent babble of uncouth sounds burst out on the other side of the planks. All the carriers were speaking together, and in the midst of the uproar the lamentable voice of the chief agent was heard “giving it up” tearfully for the twentieth time that day. ... [The chief accountant] rose slowly. “What a frightful row,” he said. ... Then, alluding with a toss of the head to the tumult in the station-yard, “When one has got to make correct entries, one comes to hate those savages hate them to the death.” (159-60)

3つ目の文に見られるように、このパッセージも Landers の小説と通底する racist な言語のいくらかを共有していることは認めなければならないだろう。しかし Landers の描く James と違い、ここに登場する（4つ目の文の）“the chief agent” はアフリカ人たちをまるで統制できない無力な存在として描かれており、西洋人の優越性という発想は幻想として退けられている。さらに、帳簿をつける邪魔になるからアフリカ人は嫌いだという主任会計士の最後の台詞は、もちろんそれ自体は racist なものであるが、この小説においては植民地支配がいかに人間

関係に歪みをもたらすかを描く伏線となっている。即ちこの台詞は、“Exterminate all the brutes!” (208) という言葉を書き付けてアフリカ人を虐待する Kurtz の行為を予兆する伏線となっているのである。この後、Marlow は別の西洋人と 2 人でアフリカ人の運搬夫たちを連れて奥地の出張所に向かうが、もう 1 人の西洋人の方はアフリカ人に担いで運んで貰っている際、彼らのうちの誰かに殴られて置き去りにされてしまい、後から来た Marlow に「あのアフリカ人を殺してくれ」と頼む。この際の筆致が、上述のテーマを強調している。

He was very anxious for me to kill somebody, but there wasn't the shadow of a carrier near. I remember[ed] the old doctor, “It would be interesting for science to watch the mental changes of individuals, on the spot [in Africa].” I felt I was becoming scientifically interesting. (162)

アフリカ人を教化し「救済」する (Marlow の叔母の言葉を借りれば “weaning those ignorant millions from their horrid ways” (149)) ことが植民地事業の目的だと謳っているはずなのに、実際にその事業に派遣された西洋人たちはむしろアフリカ人に対する憎しみの念を募らせていってしまう。アフリカ人の運搬夫と喧嘩して怒り狂う男も、アフリカ人の隊商がうるさくて帳簿をつける邪魔になると息巻く会計士も、彼らの只中にいて自分も「科学的に見て興味深い」精神的変化を起こしているのではないかと考える Marlow も、Kurtz の “Exterminate all the brutes!” という言葉によってその極致が示される恐るべき精神状態へと近付いていっているのであり、植民地支配が支配者と被支配者の間に歪みと憎しみをもたらすことをこの小説は示しているのである。<sup>15)</sup>

Landers の小説においては、こういったことに対する問題意識は見られない。いわゆる白人、それも北欧系の白人こそが絶対的に優れているという盲目的な信念らしきものをアフリカ人までもが抱いていることになっているからだ。だから例えば James と Margaret が Kabooka への逃避行の途中でポルトガル人とアフリカ人の混血の男に会う場面では、人種上の「優劣」・上下関係がひたすら強調されるだけで、こういった (政治的・恣意的に策定された) 上下関係が西洋人とアフリカ人の上にもたらす歪みについては何の問題意識も表明されていない。「縮れた髪から混血だとはっきり分かる」この男がイギリス人女性 Margaret の美しさに仰天し、「髪が縮れていて目が茶色の」混血の女性たちや「目の黒い」ポルトガル人女性とは違うと言って驚く様子が描かれるのみである。

[When a] snuff-coloured half-bred, with unmistakable wool on his round head, ... perceived Margaret, ...his surprise knew no bounds. He...stood gazing at her open-

mouthed. So fair a creature, this poor half negro, half Portuguese, had never seen or dreamt of. And she was different from the brown-eyed, woolly headed mulatto girls he had known, ...or even to the...black-eyed Portuguese ladies he had seen[.] ... And, in truth, the three [James, Margaret, and this half-bred man], as they stood in the lamplight..., made sufficiently distinct pictures. (191-92)

言うまでもなく、美の基準は後天的・文化的に刷り込まれるものであり、金髪碧眼の女性を「見たことも想像したこともない」（“had never seen or dreamt of”）男が初めてそういう女性を見た時に美しいと感じるかどうかは疑わしい。ここにあるのは、北欧系の金髪碧眼の人間こそ最も美しいという基準が文化に関係なく普遍的・絶対的に存在すると盲信している作者の偏見に過ぎないだろう。

とは言え、“The Story of James Barker”には西洋人がアフリカを植民地支配することへのある種の罪の意識のようなものが垣間見られる。というのも、小説の最後で Donde がアフリカ人の反乱によって陥落し、ポルトガル人の支配が一掃されると、語り手はそれを好ましいことのように描写するからである。Donde から西洋人が一掃されたことについて、語り手はこう述べる。

With the destruction of the two factories [of Chaves and M’Gibbon], the Bay of Donde returned to the possession of the natives; for the houses were never replaced upon its shores, and the only craft to be seen on its placid waters are the canoes of the native fishermen of the village[.] (207)

“Donde *returned* to the possession of the natives” (my italics) という言い方には「これでこそ本来の状態に戻った」というニュアンスが感じられるし、2つ目の文も西洋の汽船がなくなって（現地人のカヌーだけになって）この湾がのんびりした平和な場所になったという含意を伝えているように思われる。最後の文の動詞は現在形になっており、この平和な状態が現在まで続いているのだと描写することで読者に（小説の結末にふさわしい）安心感を与えようとする意図が見て取れる。つまり西洋人の侵入はアフリカにとって邪魔だという暗示が、このパッセージからは感じられるのだ。こういった描き方はちょうど、“Heart of Darkness”における Marlow の「アフリカの荒野が、西洋人がこの地から一掃されるのを辛抱強く待っているようだった」という主旨の台詞と同工異曲だと言っていいたいだろう。“[T]he silent wilderness surrounding this cleared speck on the earth [the station built by Europeans] struck me as something great and invincible, ...waiting patiently for the passing away of this fantastic

invasion.” (166) アフリカの地にとって、西洋人は居るだけで不自然な存在だというイメージである。これは、教化・啓蒙のためという口実を後ろ盾にしながらも、やはり他の民族が既に住んでいる土地に押し入った自らの行為の決まり悪さに幾分かの罪悪感を感じている西洋人の意識の表れと見ていいだろう。

このように見てくれば、“Heart of Darkness”をはじめとする Conrad の作品と Landers の小説が多くの共通点と相違点を同時に有していることが分かる。ここまで述べてきたような特徴を持つ Landers の小説が1902年当時のアンソロジーに誇らしげに収録されていることから分かるように、この時代にはアフリカにおける象牙の取引の様子やその地でのイギリス人の冒険行を描くことが物語の（ひいてはそれを掲載する雑誌の）「売り」になり得たのであり、“Heart of Darkness”は題材の点ではその路線を踏襲していると言えるだろう。しかし同時に、Landers の小説がメロドラマティックなまでにポルトガル人・アフリカ人をイギリス人よりも劣った存在として描くのみであるのに対し、“Heart of Darkness”が Marlow の心理的变化 (“I felt I was becoming scientifically interesting”) を描き出すことでイギリス人をも含めた西洋人の墮落と植民地事業の問題点を暴露しているということを我々は軽視すべきではないだろう。Landers の小説の分析から見えてくるのは、このような題材を扱った物語が当時のイギリスにおいて商業的価値を持っていたことと同時に、Conrad が同様の題材を扱いつつもこの種の物語において優勢だった（イギリス中心主義的な）イデオロギーや価値観と苦闘し、疑問を投げ掛けているということである。おそらく、William Blackwood が当初は Conrad の作品を歓迎しながら、次第に嫌悪感を持つに至った理由の一端はそこにあるのだろう。そして、「売れ筋」を熟知した出版社の経営者たる Blackwood の見方は、おそらくこの時代の多くのイギリス人の嗜好を代弁していたと思われるのである。

### <注>

1. 例えば Randall Stevenson はこう述べている。“Joseph Conrad is often considered a...transitional figure [who marks the emergence of Modernism]. ... Older realism, what Proust calls the supposition that ‘things present themselves as they really are,’ is undermined by several aspects of Conrad’s writing in *Lord Jim*. A scepticism about how things present themselves is directly stated[...] ... The inclusion of so many narrators and points of view...fully exposes the impossibility of facts given the uncertainties of subjective, individual views of the world, and the discrepancies which appear between them.” (Randall Stevenson, *Modernist Fiction: An Introduction* (Hemel Hempstead, Hertfordshire: Harvester Wheatsheaf, 1992), 22-23.)

2. 例えば “The voices that come from the ‘heart of darkness’ are almost exclusively white and male.”

(Patrick Brantlinger, “Heart of Darkness: Anti-Imperialism, Racism, or Impressionism?” in Ross C. Murfin ed., *Heart of Darkness* (New York: St. Martin's Press, 1996, pp.277-98), 294) という批判 (“Heart of Darkness”の白人中心主義・男性中心主義を指摘するもの)は, “Heart of Darkness”批評において最早「定番」となった感がある。従来, Marlowによる語りの技法は「自分は西洋人としての(あるいは男性としての)立場からしか物を見ることができない (=自分の見方は普遍的なものではない)」というConradの懐疑的・自己批判的な認識を表すものと見られてきたが, その同じ技法が逆に「アフリカ人や女性の声を閉め出すためのイデオロギー装置」という批判を受けるようになってきたわけである。

3. *Blackwood's Magazine*というタイトルで広く知られているこの雑誌は, Conradが作品を掲載していた当時には*Blackwood's Edinburgh Magazine*というタイトルであった(1906年に*Blackwood's Magazine*と改称)が, 本稿では一般によく知られた*Blackwood's Magazine*という名称を使うことにする。

4. 例えば*Oxford Reader's Companion to Conrad*にはこう書かれている。“The works of Conrad's Blackwood period represent an important stage in his struggle to negotiate with his English cultural identity and discover an audience. His connection with the magazine coincides not only with the emergence of his English narrator Charles Marlow but also with a more direct contact with an English middle-class audience[.] ... Conrad also devises for Marlow a group of auditors...who make up a clubbish gathering around the claret bottle and may be seen to reproduce a typical cross-section of a *Blackwood's* audience. All of them are middle-aged males[.]” (Owen Knowles and Gene Moore eds., *Oxford Reader's Companion to Conrad* (Oxford: Oxford UP, 2000), 39.)

5. *Blackwood's Magazine*の論調について, 例えばJocelyn Bainesは以下のように述べている。“*Blackwood's [Magazine]* was a conservative, traditionalist magazine that liked to give its readers good fare in masculine story-telling.” (Jocelyn Baines, *Joseph Conrad: A Critical Biography* (London: Weidenfeld, 1960), 281.)

また*Oxford Reader's Companion to Conrad*には, *Blackwood's Magazine*の読者層について以下のように書かれている。“[Conrad's] connection with [*Blackwood's Magazine*] coincides...with a... direct contact with an English middle-class audience[.] ...Ivo Vidan summarizes [the characteristics of this magazine] as follows: '*Blackwood's Magazine* was conservative and imperialist, an old British magazine with a long reputation and a steady readership in the Establishment: the army, the administration, the landed gentry, the upper middle class, the clergy, and the teaching profession[.]’” (39)

6. Joseph Conrad, “Youth: A Narrative,” in Cedric Watts ed., *Heart of Darkness and Other Tales* (Oxford: Oxford World's Classics, Oxford UP, 1990, pp.93-132), 93.

以下, “Youth”からの引用は全てこの版に拠るものとし, 頁数を括弧内に示す。

7. Anthony Easthope, *Literary into Cultural Studies* (London: Routledge, 1991), 80-81.

Easthopeはこの文を皮切りに, Edgar Rice Burroughsの*Tarzan of the Apes* (1912)と“Heart of

Darkness”を比較しつつ“high culture/popular culture”の境界線を批判的に問い直していくのだが、私見ではこの問い直しはConradの作品についてあまり多くのことを開示してはくれない。Easthopeはかなり戦略的に“Heart of Darkness”を単純で racist な作品として曲解しようとしているきらいがあるからだ。例えば、“[In both “Heart of Darkness” and *Tarzan of the Apes*] the atrocity of the European invasion of Africa is acknowledged but made good by...a logic which affirms, ‘We are as bad as them [Africans], so anything we do to them is no worse than anything they do to each other.’ ... Kurtz’s barbarism...makes him no better but no worse than the people he exploits.”(83) といった具合である。“Heart of Darkness”の中でルポルタージュ風に描かれている、アフリカ人たちが強制労働をさせられている場面や森の中で死にかけている悲惨な場面をごく素直に読めば、このような解釈が生じる余地はまず無いと思われるのだが。

本稿ではEasthopeの路線とは異なり、Conradの作品が「純文学」や“high culture”といった枠に安定して収まるか否か（そもそもそういう境界線を引き得るかどうか）ということの問題にするのではなく、Conradが作品を執筆した当時の周囲の状況の一端を掘り起こすことを目標にしたいと思う。

8. このことは、1902年5月31日付けのConradの手紙（Blackwoodの代理人であるDavid Meldrumに宛てたもの）に記されている。“He [William Blackwood] told me plainly that I was a loss to the Firm. That[']s hard enough to hear at any time.” (William Blackburn ed., *Joseph Conrad: Letters to William Blackwood and David S. Meldrum* (Durham, North Carolina: Duke UP, 1958, p.150.)
9. “Although *Blackwood's [Magazine]* published two of the pieces [Conrad's essays] that were subsequently included in *The Mirror of the Sea*, ‘The End of the Tether’ can be taken as marking the end of Conrad's association with ‘Maga’ [*Blackwood's Magazine*].” (Baines, 281)
10. Edward Garnett ed., *Letters from Joseph Conrad* (Indianapolis: Charter Books, 1962), 95–96.  
以下、ConradからGarnettに宛てた書簡からの引用は全てこの本に拠るものとし、頁数を括弧内に示す。
11. Garnett, 97.
12. ConradがWilliam Blackwoodとその代理人David Meldrumに宛てた手紙を書簡集として編集したWilliam Blackburnはその序文の中で、この当時の*Blackwood's Magazine*がいかに作家にとって憧れの的であったかについて、Conradの友人でもあったHugh Cliffordの言葉を引き合いに出してこう述べている。“One of Conrad's friends, Sir Hugh Clifford, takes notice of the high esteem in which *Maga* [*Blackwood's Magazine*] was held during the editorship of William Blackwood. ‘It was, I think, the ambition of all young writers in my day to find themselves in *Blackwood*[.]’ ... Though his estimate concerning the ambition of *all* young writers is doubtless exaggerated, Clifford does convey the sense of pleasure and achievement a new writer experienced at being accepted by the magazine.” (William Blackburn, *Joseph Conrad: Letters to William Blackwood and David S. Meldrum* (Durham, North Carolina: Duke UP, 1958), xv.)

13. J. Landers, “The Story of James Barker: A Tale of the Congo Coast,” in H. C. Roberts ed., *Tales from “Blackwood”: Being the most Famous Series of Stories ever Published, Especially Selected from that Celebrated English Publication, Vol. 11* (New York: Doubleday, 1902, pp.141-208), 174.

以下, “The Story of James Barker” からの引用は全てこの版に拠るものとし, 頁数を括弧内に示す。

14. Joseph Conrad, “Heart of Darkness,” in Cedric Watts ed., *Heart of Darkness and Other Tales* (Oxford: Oxford World’s Classics, Oxford UP, 1990, pp.135-252), 154.

以下, “Heart of Darkness” からの引用は全てこの版に拠るものとし, 頁数を括弧内に示す。

15. George Orwell はエッセイ “Shooting an Elephant” (1936) の中で, 自分が当時のイギリス領ビルマの警官だった頃を回想し, イギリスの植民地支配に悪を感じ取ってビルマの人々に同情しつつも, ビルマの人々からの憎しみを肌で感じると自分もつい彼らに対して怒りの念を抱いてしまうという複雑な心理状態にあったことを告白している。“All I knew was that I was stuck between my hatred of the [British] empire I served and my rage against the [indigenous people]. ... Feelings like [this] are the normal by-products of imperialism[.]” (George Orwell, “Shooting an Elephant,” in *Shooting an Elephant and Other Essays* (New York: Harcourt, Brace and Co., 1950, pp.3-12), 4.)

Conrad が “Heart of Darkness” の中に書き込んでいる “the chief accountant” の台詞は, こういった洞察を先取りしたものと言えるだろう。